

神聖な音が世界を目覚めさせた時

空と夜の恐ろしいアステカの神、テスカトリポカは、無音の荒れ果てた国の静まりかえった平原をゆっくり歩いていました。どこを見ても、空虚な静寂から生まれた、精神を麻痺させるような単調さが広がっていました。男たちも女たちも、いつも通りの生活をこなし、嬉しさも、喜びも、高い日的意識もないまま、日々が過ぎていました。笑い声も、鳥の歌声も、虫の声さえもありませんでした。あらゆることがただ単に存在しているだけのように入れ、この静まり返った静寂の中で、誰も神々を思い出す人はいませんでした。

「長く続きすぎた。正す時が来た」と、テスカトリポカは決心しました。彼は、やはり、空の神であり、すべてを見通し、先見の明がありました。彼は地上を悩ますものが何か、何かなされなければならないか、正確に分かっていました——ですが、それは簡単にいくものではありませんでした。

彼が息巻くと、顔の黒いしま模様がすごい力で脈打ち、そのために天空にしわが寄って灰色と物悲しい青色の色合いになりました。「ああ、ケツアルコアトルはどこにいる、風の神よ。彼が必要なのに。彼の無比の動く力は、この気のめいる無音から地上を救う私の計画に不可欠なのだ！ 今はハリケーンの季節だから、彼は海を波立たせるので忙しいに違いない」と、テスカトリポカは、心の中でいらいらして考えました。

ちょうどその時、ケツアルコアトルが、羽毛で覆われへビのような輝きを放って雲の陰から現れると、力強い咆哮(ほうこう)をあげて濡れた羽を振り払いながら降り立ち、思考にふけるテスカトリポカをはっと驚かせました。

「今のは必要なかっただろう」と、空の神は、黒く膨らんだ両目をギラギラさせて主張しました。

「おい、空よ、私は波をかき立てるのに、とても忙しいのだ。それで、どうして私を呼び出したのだ。緊急でないのなら、後にしてもらえないか」

空の神はため息をつきました。「風よ、尊大ではないか。さあ、荒れ狂うのをやめて、何が聞こえるか教えてくれ」

ケツァルコアトルは羽で覆われた耳を真っすぐにしました。「全く何も聞こえない！」と、彼は叫びました。

「その通り！ 何もだ！ 一つのメロディーも鳴り響かない。心を喜ばせる甘美な音もない。我々を崇拝し、たたえる歌もない」

目前にある地平を見渡すテスカトリポカの両眼は大きく開き、「すべての元素を活気づかせる音楽の種をこの世界は必要としている。そうすれば、それらの元素は目覚め栄えるのだ！」と宣言しました。

「それは全く正しい、空よ。しかしこれをうまくやるには、どうすれば良いだろう」

「風よ、信じられるか？ 太陽神トナティウには、夜明けから夕暮れまで彼のために演奏する天上の音楽家たちでいっぱいの住まいがあるのだ。彼の生活はとても異なっているに違いない！ 喜びに満ちてうららかに違いない！ しかし、彼は音楽家たちを我々と共有することを拒むのだ」と、テスカトリポカは言いました。

「共有しない？ よくもそんなに自己中心的でいられるものだ！」と、ケツアルコアトルは同意しました。

「そうだ。おまえには、太陽神の家に行き、彼の最高の音楽家たちと聖なる楽器を地上に持ち帰ってもらう必要がある。いいか、我々は地上を目覚めさせなければならない。絶対にそうしなければならないのだ。我々には音楽が必要だ」と、テスカトリポカは断言しました。

風の神は、即座に気を付けの姿勢を取りました。「それ以上言うな、空よ！ ただ何をすべきか教えてくれ。それを成し遂げて、地上に音楽家たちを連れてこよう」

「では、よく聞いてくれ。まず太陽にたどり着くために、私の信頼する腕の立つ助手たちに頼る必要がある。クジラの聖霊、水の女の聖霊、そして、カメの聖霊だ。彼らは、地上と天上の領域を渡ることができる橋を作れる」と、テスカトリポカは説明しました。

一瞬のうちに、風は海岸に駆け付けました。そこで、彼は魔法の力を持つそれらの助手たちを召喚し、空に向かって頑丈な橋を編むように命令しました。超自然的な力によって、聖霊たちは、自らの姿を絡み合わせて頑丈なロープを作りました。ロープは、らせん状になり、雲を越えてものすごい高さになりました。それは壊れることのない橋となり、太陽に向かって伸びていきました。

喜びに満ちたヒューという音と共に、風の神は天上へと上昇し始めました。橋に導いてもらいながら、彼は上に向かって飛んで、じきに最上部に着きました。彼には、遠くに太陽の神の家の明るい門が見えました。しかし、そこにたどり着くのは容易ではありませんでした。迷路のように曲がった高い壁が彼を堂々巡りさせているように思えました。

風の神は一休みしました。その静けさの瞬間に、彼は神秘的な音を聞きました——それは、穏やかさと活気、軽やかさと力強さ、豊かさと共鳴を共に備えたハーモニーでした。彼はこんなにも感動を覚えたことはありませんでした。彼の存在の隅々までが目覚めました。その音は彼を自らの内側に引き込みながら、同時に周りにあるすべてとの一体感をも感じさせました。まるでこの宇宙の根底に響き渡るような、豊かな旋律を発見したかのようにでした。ケツアルコアトルは内なる明快さで輝き、それと共に、彼の道を阻んでいた迷路はすぐに消えました。内側に大きな確信を持って、今、彼は輝く太陽神の聖域に向かって真っすぐに飛んで行きました。

トナティウの広大な虹色の中庭には、この魅惑的な音楽の源である音楽家たちがいました。黄金色の衣装を身に着けたフルーツ奏者、空色をまとった吟遊詩人、癒やされる白に身を包んだ子守歌の歌手、そして鮮やかな赤い服を着た愛の歌を歌う歌手たちから、この上なく美しいハーモニーが湧き出ていました。彼らの音楽は、神々への献身と深い愛で輝いていました。ケツアルコアトルが音楽家たちに見たもの、聞いたものはすべて、光と喜び、そして命の表現でした。

「おお、そうだ、これはまさしく地球が必要としているものだ」と、ケツアルコアトルは思いました。奮い立ち、意を決して、彼は音楽家たちを自分の下に引き寄せようと、自分自身の歌を歌い始めました。彼は希望と憧れに満ちた声で、思いやりと愛、感謝と慈悲、そして優しさと寛大さについて歌いました。ケツアルコアトルが歌う繰り返し句を聞くと、トナティウはハチドリ羽のたてがみを振り、ワシの爪のある手を握りしめました。怒りに燃えながら、彼は聖域から中庭へと闊歩(かっぽ)して行くと、すぐに音楽家たちを黙らせました。彼は、風の神の魅惑的な呼び掛けに応えた者は、暖かい巣穴からすぐさま連れ去られ、ケツアルコアトルの冷たく暗い世界での支配に永遠に捕らわれるだろう、と警告しました。

彼の警告にもかかわらず、音楽家の何人かが、風の神の歌をとっても美しく魅惑的な旋律だと感じ、喜んで応じました。彼らがついて行く時、自分たちの神聖な楽器をすべて持って行きまし

た——例えば、トラピツァリという複数の管がある甘美なフルート、そして聞く人に勇気と勇敢さを鼓舞するウエウエテルとテポナストリと呼ばれる打楽器などです。

ケツァルコアトルが、音楽家たちを神秘の橋へと連れて行くと、彼らはその羽毛に覆われた背に乗りました。それから、橋の輝く道をたどり、彼は優雅な滝のように、下に降りて行きました。世界の絶え間ない渴きをすぐにも癒やそうと。

地球は彼らが今にも到着するのを感じ取り、安堵(あんど)のため息をつきました。ケツァルコアトルは大きな身振りで着地し、音楽家たちが新しい家に降りるのを満足して見守りました。それから彼は見事に橋を作った者たちの奉仕に、あふれんばかりに感謝しました。

音楽家たちは驚きに目を見張り、この世界の不思議な沈黙に浸りながら、この異郷を歩き回りました。その後、楽器を包むように持つと、彼らはゆっくりとした優しい調べを演奏し始めました。歌い手たちは神の歌を声高らかに歌いました。彼らの最初の音は、この地、水、そして空気の沈黙の中を通過して動きました。純粹で滑らかで、軽快なメロディーは、地球の一方からもう一方の端へと流れ、その甘美な響きの中にすべてを包み込みました。

長い年月、沈黙のままに流れていた川は今、川沿いにせせらぎ、喜びにサラサラと音を立てていました。沈泥だらけの川岸は、木々に愛情込めて呼び掛けました。木々は自らの眠い頭を揺り動かして 100 万の葉を広げると、生命を与えるメロディーに合わせて滑らかに揺れ動いていました。鳥たちは 100 万の歌を一斉に歌い始め、花々は香り咲き、その甘い蜜は陽気なハチたちを誘い、そしてチョウは虹のすべての色を身に着け始めました。

一匹ずつ、地球の動物たちは自らの音を見つけました。ゾウは雄大なラッパのような鳴き声をたて、ライオンはゴロゴロとのどを鳴らしてうなり、オオカミは勝ち誇ったように遠ぼえをしました。

大きい物から小さい物まで、それぞれの生き物は、目覚める地球の音に合わせてさえずり、リズムを作り、打楽器のような音を出し、神秘的で、聞き慣れた軽快な声を添えました。

そして、人間に関しては、彼らは自らの甘美さと、その上に調和をも見つけました。彼らの歌は鳴り響き、再生と鼓舞をもたらした生命を与える音への喜びと感謝に満ちあふれていました。彼らは火と水の荘厳さ、音と沈黙、夜の暗闇、そして、輝く日の光を与える神々をたたえて舞い歌いました。

その時以来、音楽は愛、希望、恩恵、そして感謝を喚起する魂の普遍的な言葉になりました。そして、それぞれの旋律を作る音に祭られているのは、地球上の生命の、すべてを育む永遠のシンフォニーを生み出した神聖な音です。

